

Girls und Panzer雄型  
外伝～Our Panzer～

Friedrich

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

ガールズアンドパンツアー雄型外伝 Our Panzers

大洗学園が優勝し、戦車道界に大きな衝撃が走った。

長年保守的だといわれた戦車道連盟も史上初の大改革を始め、多くの学校に門戸が開かれ、正に戦車道界に新時代が訪れようとしていった。

その動きに呼応するかのごとく、戦車道に参加する高校は増えていった。

その中には、その年に開校した学校があった。

この話は作者様の了承をいただき、Girls und Panzer雄型の初期設定を元にオリキャラ達が活躍するという内容です。

後日談や世界大会編や他の二次創作の設定（作者様の同意を貰えたら）などを盛り込んで、いきたいと思います。

お恥ずかしい話、小説の類を作るのは初めてですが、

温かい応援を宜しくお願いします。

※諸事情により、打ち切ります。

新しい作品もよろしくお願いします。

# 目次

第一話 新たな一歩であります！

1

第二話 考え中であります！

7

第参話

10

第4話

16

第五話

21

第六話 新しい戦車であります！

26

第七話 テストであります！

30

第8話

35

# 第一話 新たな一歩であります！

「……俺達も大会に出るんだな……。」

僕はカレンダーを見て、そう独り言を言った。

今は戦車道全国大会が終わって、世界大会だとか、新チームだとかになっている時期である。

僕の名は、東條征爾。

高校一年生で、戦車道部の部長でコマンダー、つまりチーム全体の指揮する役割を務めている。

一年生で主将になっていると聞くと僕のことを天才だとかなんとかわれるかもしれないが、

それとは別の事情が違う。

戦車道部には、二年生以上がないのだ。

というか、この育英館高校には二年生の二人以外はみんな一年生なのだ。

どういうことかという、育英館高校は今年開校したばかりの学校なのだ。因みに二

年生の二人は編入してきた転校生である。

ガラガラガラ。上坂さんが来た。彼女は戦車道部の女子主将を務めて、下の名前は玲奈。容姿端麗で、

少しお嬢様な感じだが、戦車道の实力はチーム随一の一年生だ。カリスマ性のようなものがあるらしく、一部の部員は「玲奈様」と呼んでいるそうだとか。ついでに意中の男子はいるそうだが、その人が誰かは誰も知らない。

「ねえ、今日、幹部は集まって聞いたけど、何についての話か聞いた？」  
「聞いてないよ。新しい戦車のことじゃないかい？」

「そうかもね。今の戦車、リースしているものだって大谷先生も言っていたものね。」  
ガラガラガラ。

今度は欣一が来た。彼のフルネームは石原欣一。男子主将の二年生で、小学生以来の悪友で、同級生。成績は良い方だが、勘とヒラメキに任せて何でもするタイプである。基本的に馬鹿ばかりしているのに、何故か彼女がいる。

「いやあ、東條君、元気がね〜。」

急に言われたので、はい？って思った。

なんかサ○エさんに出てくるア○ゴさんの真似(?)をしているようだが、全く似てない。いつものことながら、彼が何をするか予想が出来ない。

なぜか上坂さんは爆笑している。どうやら、ツボにハマったようだ。

ガラツ

誰かが戸を開けた。「校長先生！」校長のヨシフちゃんこと吉歩（よしあゆむ）だった。

「やあ、諸君、諸君にちよつとしたお知らせがある。」と言ってプリントの束を渡した。

「このプリントにある通り、次の日曜にブラウダと練習試合することになった。あと、来週の日曜日きくる新しい戦車について資料も渡しとくから。あとは豊ちゃんに聞いてくれ。ワシからは以上だ。」

ガラツ。バンッ

「ヨシフちゃん、言うだけ言って何処か行っちゃった。」欣一はそう言った。全く同感である。

「お〜い、いるか〜。」ガラガラガラ

今度は、戦車道部の監督の豊ちゃんこと大谷豊である。

「揃っているね。じゃあ、早速話をするね。ええと、さつきヨシフちゃんからプリントをもらったかな?」

「それならありますよ。」そう言ってプリントを取った。

「3部あるから配っておいて。」

「ええ、今日、幹部を集めたのは3つ用事があるからなんだ。1つは、ブラウダ高との練

習試合についてだ。」

「えっ、ブラウダ高とですか。」上坂さんが声をあげた。

「ダンコーって隊長がヤバいって聞きましたよ。」

欣一も言った。

「ダンコーに何されるか分からないのが不安でしょ。不安になるのは、わかるよ。ただ、ブラウダの方もそれを考慮して彼をコマンダーとしておいて、世界大会に出る副隊長のノンナ以外は新チームにするって条件をつけてくれたよ。それに連盟も彼を監視しているから、大きな問題はない筈だよ。」

豊ちゃんは言った。

「それなら大丈夫かな。」少し上坂さんは安堵したようだ。

「それでだ、今までは僕が作戦を決めてきたけど、今度からは君たちに考えてようにさせてみようと思ってるんだ。」

「えっ。」僕も含めて皆驚いた。

「驚くも何も、最初から時期を見て君たちに任せるって言ったじゃないか。」豊ちゃんは言った。そういえば、そうだった。入学してすぐの戦車道部でそう言ったのだった。

「そうですか。」皆納得したようだ。

「一応、ブラウダ高の今年の戦績と戦法などデータはプリントにあるから見ておくよう



にね。で、次の話だけど、来週の金曜日に新しい戦車と今までの戦車を入れ替える件についてだけど……。」

「それなら、校長先生から聞きましたよ。」欣一は口を挟んだ。

「なら、話は早い。木曜日迄に戦車を返せるように、整備と装備の取り外しをしておくように、言っておいてくれ。最初の時よりも綺麗にしておくようにさせてくれ。あと、新しい戦車についてだけど、誰がどの戦車に乗るか、話し合うから、来週の土曜日の昼にまた集まるように。最後の話だけど、実は、自衛隊から毎週日曜にコーチが来ることになった。栗林忠志と言って栗林流の免許皆伝の師範だそう。今度のブラウダ戦に観に来られそう。僕からは以上だ。何か質問はないか? ……ないみたいだから、解散。」

今日はチームの練習はないので、寮に帰って勉強と幹部での話し合いをすることを上坂さんと欣一に言っておいた。

寮に帰ると、授業の復習をザツとして、夕食をとった。その後の30分程の自由時間をつかって、幹部と話し合いをした。内容はブラウダ戦での作戦についてだ。豊ちゃんからのデータによると圏を使って相手をキルゾーンで誘い込む「サラミ戦法」を多用するそう。最近では対大洗戦でフラッグ車で大洗を包囲し、降伏寸前まで追い込んだという例がある。又、今では反則行為だが、相手の戦意を削ぐ為に休戦中に砲撃をしてい

たそうだ。ということは、おそらくは反則行為はしないとしても、かなりラフなプレイをしてくることも有り得る。

かなり厳しい戦いだ。

どうにも、良い作戦は出てこない。時間もなかったので、作戦を考えることを宿題にして一旦解散とした。

## 第二話考え中であります!

結局、私、上坂玲奈は今日、なにも具体的な作戦を出せなかった。初めてだから、仕方ないかな。

でも、ブラウダ高校の作戦は分かったのは、大きな成果なのかも。

少なくとも、今分かっていることは、ブラウダ高校の得意とするサラミ戦法をどう崩していくか考えていく必要があるということ。

先生や東條君、石原君たちと情報を交換したり、議論して、考えを深めていくしか無いようです。

その後は復習とか課題をした後、疲れ切ってすぐ寝てしまった。

――

午前3時17分・・・。

俺、石原欣一は目を覚ましてしまった。

眠気は不思議なことに全くない。

なんだか、寝ていられない気分だ。

かと言ってゲームとかネットとかで時間を潰す気にもなれない。

ブラウダ戦の作戦のことで頭がいっぱいだった。

どうやってあのサラム戦法を破るのか……。

何をどう対処するか。

追うとしたらどこまで追うのか。

どうやって伏兵を潰していくか。

罠に掛かってしまったら、どう抜け出すのか。

そもそも、罠を掛けるなら、どの辺りで掛けるのか。

KVとかスターリンとかをどう潰していくか。

頭の中でどうするか、浮かびそうで、浮かばない。

延々と考えていたが、とうとう起床の時間になって征爾が呼ぶまではつきりとは浮かばなかった。

放課後まで持ち越しになった。

――

幹部での話し合いはあまり進まなかったが、最近の試合の映像を見たら、一つ弱点が見えてきた気がした。ブラウダは射撃の精度が高くないのだ。例えば、大洗戦では、サラム戦法が上手くいき、包囲できたところまでは完璧だった。それにもかかわらず、撃

破されたのはゼロ。火力は大洗からしたらかなり高いのだから、何台かの撃破はできたはずである。おそらくはブラウダの練度は一部を除けば、低い。まして、砲の精度が低いソ連製だ。うちもT-34/85とISU-152ではあるが、うちは戦車道を長くしている人が多いし、練度は低くない。

多分、サラミ戦法の対処法を知っている人もいる筈だから、何とかなるかもしれない。そう思つて、ウラジーミルに聞いてみた。ロシアでも名の通つた選手だそうだから、何か良い案を出してくれるかもしれない。

ウラジーミル曰く「囹は追わないで、一発で仕留めると良い。できなかつたら、無視でもいい。」

伏兵について聞いたなら、「射撃の良し悪しも大事だけど、相手に見つけられる前に先に相手を見つける勘の良さとか大事。」だそうだ。

千須賀さんに聞いて見たら、小隊単位で動いて撃たれる前に撃破するしかないだそう  
だ。

なんだかんだあつても、作戦は立てることはできた。

問題は試合でどれだけできるかということだ。

その為にも、訓練で鍛え込むしかないのだ。

## 第参話

今日の訓練は、

Ilvslの紅白戦だ。

赤組はウラジミルとエミが

白組は征爾が指揮をとった。

俺と上坂が征爾を補佐する。

！

赤組はブラウダ高校戦を想定して、待ち伏せ作戦を取る。火力もISSU—152があるから、かなり強力だ。しかも、あの二人は男女の副隊長だが、戦車道の強豪国でも名を知られている。実力はかなりのものだ。

幹部で話し合い、4両、3両、3両の3小隊で待ち伏せしている戦車を潰していくことにした。

小隊ごとに分かれた後、すぐにフラッグ車が姿を見せた。

しかし、狙いを定める前に丘の影に隠れた。多分、丘の東側の林で待ち伏せているだろう。

「よしつ、俺について来い！」そう言っ行って方を追おうとしたその時、

ドーン!!

不意に砲撃を受けた。

慌てて、周りを見回すと、後方にISU—152が待ち伏せていた。

しかし、1両しかないなので、構わずにフラッグ車追跡を続けようとした。

しかし、丘の影からは4両のT—34が出てきた。

どうするか

前は、T—34が4両、左右は通れない。後ろはISU—152が1台、後ろを強行突破するしかない。最悪2両やられるかもしれないが、やむ無し。

「一列縦隊で蛇行して後退、3号車は俺の前、最後尾は正面をISU—152に向けろ！」

隊列を変えて、後退した。

至近弾が何度も掠める。

「2、1号車、順に榴弾発射、どんどん撃て。標準をぶれさせろ！3号車、ISU—152の履帯を切れ！」

撃破はできないが、やられる確率は減ったはずだ。

「(こ)ちら4号。履帯切りました。」

ISU—152はしばらく無力化できた。

「全速後退！真つ直ぐだ！」

ISU—152の後方まで下がった。

そして、ISU—152の後ろから撃ち抜いて、撃破した。

そうすれば、盾ができる。

上坂の小隊が救援に来ると連絡があつたから、それまで持ち堪えればいい。

「シヨットトラップを撃て。」

T—34／85の砲塔は傾斜装甲は打ち抜きにくいが、下半分に当たると装甲が弱い車体上部に当たるとのだ。

「13号車を撃破！」相手は3両になった。

「こちら東條小隊。4両と交戦中。囲まれた。上坂小隊は援護に來い！欣一、目の前の相手を釘付けにしろ！」

征爾から無線が来た。

「了解。」

「OK、任しとけ。」

ドーン！

「こちら3号車、すまん、撃破された！」



「場所が悪いから、仕方ないさ。2号車、3号車を盾にしろ。」

相手は丘の反対側に逃げ道がある。そこから味方に攻勢をかけられるとまずい。

「こちら東條小隊、1両撃破し包囲を脱出した。」

「おい、征爾。丘の東側に2両よこしてくれないか。」

「OK、上坂小隊に向かわせる。」

「こちら上坂小隊、今から参ります。」

「これで何とか丘の上は釘付けにできる。」

問題は他の敵がどう出るかだ。

「こちら上坂小隊。待ち伏せ攻撃を受けて5号車が撃破された。」

「大丈夫か。」

「後ろの車両が待ち伏せていたのを撃破したよ。」

待ち伏せか……。

「征爾、相手の残りは何処か分かるか？」

「把握できていない。」

「偵察を出した方が……。」

「分かっている。」

「こちら、9番、敵フラッグ車を捕捉した。場所は……。」

「こちら11号車、了解した。周りにいる伏兵を探し出してくれ。」

「こちら10番、伏兵を捕捉した。場所は……。フラッグ車を追う時に通るかもしれないので、注意してください。」

「こちら東條小隊、今からフラッグ車へ攻勢を掛ける準備をする。9号車、8号車は伏兵を排除しろ！10号車はフラッグ車を今から言う場所におびき寄せろ。」

「了解!!!」

「こちら上坂小隊。丘の上の敵がこちらに攻勢を掛けています。」

「落ち着いて、撃破しろ！できなくても、行方を追え。」

「こちら、上坂小隊、1両撃破しましたが、残りの2両は、突破されました。ただいま、追跡しています！」

「欣一、伏兵狩りに加われ。」

「こちら、9番、相手の偵察を発見。フラッグ車からの偵察のようです。こちらに気づいていないので、追跡します。」

「こちら、8番。ISU—152を発見。西から味方のフラッグ車を狙っています。す

ぐに……、

「全速前進!!!」

ドーン!!! ISU-152はフラッグ車が動くと同時に発射した。あとほんの0.1秒でも遅かったら、撃破されただろう。

「危ないところだった……。」

「征爾、伏兵の位置は把握できたか?」

「まあ、一応。攻勢を掛けようか。」

「おう。」

「さっきの指示の通りに動け。」

そうして、伏兵を潰しにいった。

味方は3両やられたが、確実に敵を潰していった。

残りフラッグ車と2両となり、最後の攻勢をかけていった。

しかし、残りの2両が巧みに待ち伏せて、残り3両まで減らされた。

結局、待ち伏せている味方が撃破した。

監督は「ブラウダは、まだまだ手強いぞ。これでは、ボロ負けだ。」と辛口だった。

明日はブラウダ戦。

その後は、整備をして、ゆっくりとした。

## 第4話

ブラウダ高戦前日

ここはブラウダ高校学園艦

「ほほう、実に充実している設備だ。イワン君には勿体無いな。．．．うん？」  
車庫の中誰かの呻き声が聞こえてきたようだった。

「貴様なんかこうだ!!この役立たずが!」

ボカツ!ドフツ!

「お許し下さい、同志ダンコー!」

どうやら、ダンコーという生徒が暴力を振るっているようだ。

そういえば、ブラウダの男子の隊長は乱暴だと聞いたな。

「そこのおぼっちゃまくん。何をしているのかね？」少し挑発してみた。

「ああ?!」挑発に乗ったようだ。

「聞こえないのですか？何をしていますのですか、おぼつちやまくん？」さらに挑発してみた。

「誰だか知らんが、俺に『おぼつちやまくん』なんて呼ぶなよ、おじさんよお。」

単純な奴だ。もう怒った。

「ああ、それは済まなかつたな。ははっ。

で、何をしていますのかね？おぼつちやまくん。」

「…ふざけているか、おじさんよお。」

「別にふざけているつもりは無いですが？」少しとぼけたふうに言ってやった。

ブチッ。

「おい、おじさん、あんまりふざけていると殺すよ。」

そういつてトカレフを出した。

どうやら、キレたようだ。

「ほう、君は私を殺すのかね？冗談なら止めてくれ、少年。」

冗談を交えながらも、少し驚いた素振りを見せてみた。

「ああ？俺は本気ですよ。謝るなら今の内にしとけよ。」

カチャ。頭に血が上り切っているようだ。

実に単純な奴だ。

「ほほう、コケ脅しかね。あまり大人を馬鹿にしちゃあいかん。」

「何を言いたいのか。」怪訝そうな顔を見せた。

「君は、ヨシフ・ヴィサレノヴィチ・ジユガシヴィリを知ってるかね？ヨシフ・スターリンのことだよ。そいつはお前さんも知つてのとおり、おつそろしい独裁者で有能ではあつたが、・・・」

「…だからなんなんだよ…？」

「お前さんは銀色の肅清者とか言われているが、所詮は乱暴なだけの臆病者つてことよ。分からないのかね？」

「…くっ…」凶星だったようだ。

「ほれ、撃たないのかね？それとも、撃つ度胸もないのかね？」

コイツはどうせ撃てないだろうから、煽ってみた。

「…クソ、覚えてろよ。後で生徒が痛い目あつても知らんぞ！」ダツ。

意外とヘタレな奴だった。

「ありがとうございます！」背後から声が聞こえた。

「礼には及ばん。それでも教育者の端くれだからな。ハハハッ。」

少し気を利かせて、格好いいことを言ってみた。

「おお、いたいた。おい。ヨシフー。」不意に私を呼ぶ声が出た。

「おお、イヴァン君か。久しぶりだな。」

彼は、イヴァン・ジューコフ、大学以来の友人だ。

因みにソ連の英雄ジューコフ元帥の子孫だそうだ。

ブラウダ高戦車道の監督である。

「ヨシフがいないから、困りましたよ。」

「ごめんごめん。いっぺんブラウダの設備を見たかったもんでな。それに、大学からいい人材を見つけて来いって言われてたんでね。」

まあちようど良かった。君の所の元隊長はダンコー君だったな大学に推薦しておくよ。アイツは血の気が多いが、しごき甲斐のあるガキだ。あと、ノンナちゃんだっけ世界大会に出ている子、一緒に推薦しておくな。」

「ははっ。そりゃあアイネ。ノンナが入るなら、カチューシャも入るさ。」

「あのおチビちゃんもか。そいつは最高だ。」

「そうそう、ウラジーミルはどうかい。」彼の息子ウラジーミルは我が校の戦車道部にいるのだ。

「とても頑張っているよ。練習も真面目にしているしね。成績もいいそうだよ。あと、今日、試合に出るんだ。」

「ははっ。足引っ張るているんじゃないの?」

「いやいや、戦車の指示も的確だし、戦術も申し分ない。隊長にしてもいいくらいだ。」

「そりゃあ、びつくりだ。試合でその実力を見せてもらおうじゃないか。」

「ハハハハ、楽しみにしてくれよ。おっともうこんな時間だ。試合の準備をしないと。じゃあ、あとで。お互い、頑張ろう。」

「ああ。」

我が校の陣営に戻ると、もう準備を済ませた生徒が円陣を組んで気合いを入れていた。

私からは全力でぶつかって行けとだけ言っておいた。



## 第五話

試合直前、どこか行っていた校長が戻ってきた。

多分、親父のどこだろう。校長は親父と仲が良いから。

とにかく、試合に集中しよう。

ヘルメットを被ると、戦車に乗り込んだ。

「「よろしくお願いします!!」」 試合が始まった。

ブロロロ・・・エンジン音とともにT-34は発進した。

今日の作戦は、昨日の紅白戦同様、小隊を組んで、伏兵を各個撃破していく戦法だ。

・・・もつとも、僕は昨日伏兵の役だったけど。

全国大会1回戦と同じ12VS12のフラッグ戦で、

相手は、公式戦同様の布陣。こつちが経験が少ないとしても 容赦はしないだろう。

うちもT-34/85やISU-152だから、火力負けはしないはずだ。

スターリンもISU-152の榴弾でなら、ホプキンソン効果（榴弾による衝撃波で敵戦車の内壁を剥離させたり、機械を故障させる効果）で撃破できる。

こちらは、4両ずつに分けた小隊をそれぞれ

石原君、上坂さんと中須賀さんのコンビ、そして僕が指揮を執る。

僕の小隊はISU—152が2両、T—34が2両。

スターリンとか重戦車と撃ち合って勝つ役割だ。

5分ほど動き回っているとフラッグ車に出くわした。

ISU—152の射程距離内だ。

多分、サラミ戦法かキルゾーン防御だ。

守りの弱い所、不注意なことをする車両には、注意だ。

「こちら、ジューコフ小隊、フラッグ車を発見。」

コマンダーの東條君に無線で知らせた。

「深追いはするな。出来れば、一発で仕留めろ。」そう東條君が指示を出した。

分かりきったことだが、大事な事だ。

「12号車、フラッグ車を撃て。一発で仕留めろ。」

「OK。下波、仕留めろ。」

「了解。」

ドーン！

「プラウダ高校フラッグ車撃破!! よって育英館高校の勝利!!!」という審判の声を聞いた。

誰もが驚いたに違いない。

実際、僕も驚いた。

下波君が射撃が上手いとは言え、動いている目標に一発で当てるなんて芸当は最新のMBTでないとできないぐらい難易度が高い。よつほどの偶然としか思えない。

驚嘆するしかない。

確かに一発で仕留めろ。とは言った。

しかし、実際にできると思っていなかった。

指示を出したら、すぐに追いかけていこうとした。

「おい、今のは、本当か？」

東條が無線で聞いてきた。

「本当さ。現にフラッグ車が白旗を上がっている。僕も、信じられないが。」

下波君はそう答えた。

試合時間は、5分ちよつと。

偶然とは言え、こんなに早く終わる試合は初めてだ。

結局、予定を変えて第二試合をすることになった。

結果は、敗北。

今度は、相手が真つ向から突つ込んできた。

意表を突かれ、押されそうだったが、的確な征爾の指示もあり、反撃し出すと、すぐに巻き返し、優勢になった。

しかし、IS―2からフラッグ車を狙撃されて負けた。

しかも、約1.7kmという距離から。

世界大会に出るノンナさんが撃つたらしい。

試合終了後

整備をしていると、

カチューシャさんとノンナさん、サーシャさんがやってきた。

意外とカチューシャさんは小柄だった。

というか年上とは思えなかった。

そんな「可愛らしい」カチューシャさん曰く

「練度も作戦も中々じゃない。あの『馬鹿』がフラッグ車を囮にさせなければ、面白い試合だったのに。今度は圧倒してやるんだから。」

ノンナさんも

「あんなに射撃の上手い人は見たことはありません。誰がフラッグ車を撃破しましたか。」

下波が名乗り出ると、

ノンナさんに「あんな見事な射撃は初めてです。」と褒められて、少し浮かれていた。

反省会では、

フラッグ車とその護衛の行動をもつと考えるように言われた。

## 第六話新しい戦車であります！

す！

月曜日、火曜日、水曜日は、いつも通りに訓練をした。

内容は、筋力トレーニングをし、

装填手と砲手は射撃訓練、

他は隊列を組んでの移動をした。

その後、行進間射撃をした。

木曜日は今使っている戦車を入れ替える為に、

整備をした。

そのあいだ、東條を始め、隊長、副隊長は、

新しい戦車の乗員を考えていた。

新しい戦車は

T—44

IS—3

ティーガーII

M18スパーヘルキャット

但し、これらはいくまでベースであり、

実際は規則で出来る最大限まで改造されたものだそうだ。

まずは、新しい戦車の特長を考えた。

まず、T-44。

これは数的には主力で、装甲は、火力はパンターと同じ70口径75mm砲に換装され貫通力は至近距離ならティーガーIの88mm砲よりも強い、機動性も最速50km/h程度と良い。

次にIS-3。

これは2台と少ないが、これはフラッグ車の役をする為のチョイスらしい。装甲は傾斜装甲でアメリカの90mm砲を弾いただけあつて硬い所はかなり硬い。弱い所は予備の履帯などで強化するそうだ。機動性はかなり強化されているらしく、最速50km/hとT-44と遜色ない程高い。主砲は122mm砲から70口径75mm砲に変わった。これは、スターリン戦車が装弾数が少ないという問題を解消するためと砲の種類を強力な割に比較的砲弾が安い71口径88mm砲と70口径75mm砲に絞って、コストを安く抑えるためだそうだ。

ティーガーIIは装甲と火力は言うまでもなく、トップクラス。機動性はティーガーハイブリッド化キットでポルシェティーガーと同じハイブリッドに改造され、足が遅くなり、登板能力は落ちたが、故障が減ったようだ。

最後にM18スーパーヘルキャット。これは、WW2中最速の装軌車両で、90mm砲から71口径88mm砲に換装されている。また、元々はオープントップで戦車道で使用できなかったが、天板設置により使用が認められた。

また、88mm砲は砲身が長い為、バランス調整の為にバラストを積んでいる。機動性も向上させている。ただ、装甲が薄い為、正面から突撃するというよりは、待ち伏せや機動性を活かしながら遠距離射撃での攻撃をする。

まず女子から挙がった意見はティーガーIIはすべて男子の小隊が担当することだ。ティーガーIIは故障こそ減らしたが、履帯や転輪が外れやすく、修理が頻繁に必要なからだ。

次にM18は女子の大会のことを考え、女子の小隊が担当することになった。

IS-3は男女1台ずつになった。上坂と欣一が車長を務めることになった。

T-44は男女半数ずつだ。

次にどうやって他の乗員を決めるかだ。



遠距離射撃をメインとするティーガーとヘルキャットは射撃が上手い人を優先的に回し、フラッグ車をするIS-3は操縦の上手い人を優先的に回すことになった。それを決めるのは、明日からだ。

## 第七話テストであります！

「今日から、新しい戦車の乗員を決めるために戦車道のテストをする。」大谷先生がいうと、

部員はざわついた。

しかし、先生は続けた。

「今日は操縦のテストをする。操縦手と操縦手経験者は俺について来い。他は、基礎トレーニングをすること。ウラジミル、石原は男子を、上坂、中須賀は女子を仕切れ。」

「はい。」

先生は、操縦手達と格納庫の方へ行ってしまった。

基礎トレーニングはランニング、全身の筋力トレーニングをする。

「オラア！もつと気張らんかい!!」

石原君はへばっている部員に檄（罵倒？）を飛ばしている。

一方、女子は足並みをそろえている。と言っても遅い人に合わせているだけだが。

30分後、石原君はへ口へ口だった。ずっと先頭を走ったのだから仕方ないか。しか

し、それでも、

「次は、筋トレだ!!」

「一、二、三、四・・・」

へロへロなのに、よく頑張っている。

しかも、手抜きを見つけたら、

「装填手が手抜きしてどうする!」

「練習で手抜きしてどうする!」

とか檄を飛ばしている。

――

東京のある高校。

「はあ・・・。」少年は悩んでいる。

少年の名は綾崎颯。

とある家の執事を務めている薄幸な高校2年生だ。

彼はある授業について悩んでいる。

ことの発端は1ヶ月前。彼の通う白皇学園の理事長が突如「白皇の生徒を鍛える。」とか言って、戦車道の授業を必修にしたのだ。

彼は授業で戦車道の才能を見い出され、学校代表チームに、出るよう言われたのだ。しかも、授業料免除、留年無しという破格の条件付きで。

しかし、学校代表チームに出るといことは、執事の仕事をできない。彼が背負っている借金が返済できないのだ。

「ハヤテ、何を悩んでいるのだ？」

少女は、ハヤテに問いかけた。

少女の名は三千院ナギ。

ハヤテの主である。

ハヤテと同じ高校2年生である。

「お嬢様、実は……」

ハヤテは破格の条件付きで戦車道の学校代表に選ばれたこと、学校代表チームに加わり執事の仕事をできないことを全て話した。

「ふーん、そういうことなのか。それなら問題ないぞ。私も戦車道の学校代表チームに加わるからな。」

ナギは答えた。

「お、お嬢様もですか!？」ハヤテは驚いた。

「ああ、私も授業の戦車道で砲手したら、理事長に『戦車道の学校代表チームにならないか』って聞かれたから、戦車道をすることにした。」

「本当ですか?!

「ああ、本当さ。」

「ありがとうございます!!」

「何言っているのだ? 私はただ・・・、戦車道が面白いからするだけだぞ。ハヤテのためなんかじゃないぞ!」

――

育英館高校校長室

プルルルル・・・。

「はい、校長室です。」

「校長先生、白皇学園からお電話です。」

事務室からだった。

確か、白皇も来年も戦車道に出るんだったな。

「はい、今、変わりました。」

「白皇学園戦車道部の福多です。急なお電話ですみません。実は来月の3連休の日曜日に戦車道連盟に新規加盟した学校同士の練習試合と交流会をしたいと思ってお電話致し

ました。」

「はい、そうでしたか。参加したいと思えますので、詳しくお願いします。」

「えーと、場所は自衛隊東富士演習場で、昼間は練習試合、夜は交流会をしたいと思います。細かい所はメールでお知らせ致します。あと、戦車の移動にかかる費用はこちらが負担したいと思います。よろしいですか？」

「それには及びません。こちらが負担しますので。お気遣いありがとうございます。」

「そうですか。それでは。」

## 第8話

第八話テストであります！其の弐

「ふー。テストをさせるのも、疲れるなあ。」

部活を終えて職員室に戻り、ユニカースDを飲んでいると、

校長が僕に手招きしているに気付いた。

来ると、校長先生が1枚の冊子を渡して、言った。

「大谷先生、来月、白皇学園が新しく戦車道をする学校と親善試合と交流会をすることに  
なりましたよ。」

うわー。またやること増えた。

しかも、冊子を見ると、東富士演習場まで行くことになっている。

戦車の乗員が決まっていけないのに。

「あー。まだ戦車の乗員を決めるテストが終わっていないのデスガ……。」

校長室

ブルルルル……。

「はい、こちら、校長室です。」

「校長先生、白皇学園からお電話です。」

事務室からだった。

確か、白皇も来年も戦車道に出るんだったな。

「はい、今、変わりました。」

「白皇学園戦車道部の福多です。急なお電話ですみません。実は次の3連休の日曜日に戦車道連盟に新規加盟した学校同士の練習試合と交流会をしたいと思いお電話致しました。」

「はい、そうでしたか。参加したいと思えますので、詳しくお願いします。」

「えーと、場所は自衛隊東富士演習場で、昼間は練習試合、夜は交流会をしたいと思います。細かい所はメールでお知らせ致します。あと、戦車の移動にかかる費用はこちらが負担したいと思いますが、よろしいですか?」

「それには及びません。お気遣いありがとうございます。」

「そうですか。それでは。」

「そりゃあ、いかん。俺も手伝うよ。」

良かった・・・。

「で、どうするんだい?」

「校長先生におまかせ致します。」



「じゃあ、このコインで、」

「えっ。」

「冗談さ。わーはっはっははー。」

――

次の日

今日は、僕と校長先生が砲手と装填手をテストする。

僕は砲手を見て、校長先生は装填手を見る。

まずは静止した状態で1km先の静止した目標に2発撃たせる。

大体は2発で目標に命中した。

今度は、動いている目標に撃たせる。

これは、中々当てる人はいなかった。

誰がどの戦車の砲手にするか大体決まった。

校長先生も大体目星がついたようだ。

――

「やはり、北斗と伊藤はいいね。ISU―152の装填手してたもんな。手際がいい。

88mmの装填手をさせるなら、88mmでテストした方がいい。」

「校長先生、車長はどうしますか？時間があまりないですが。」

「車長はテストするまでもなからう。」

――

翌日は装填手だけがまたテスト。

結果、男子は三島と越智、伊藤、北斗

女子は我那覇、甲田、佐藤、新川に決まった。

昨日、一昨日の結果から、

砲手と運転手はどの戦車に乗るか決まっている。

あとは、メンバーを組み合わせるだけだ。